

## ドクターNAKAMURAの 健康道場



### Vol.31 死の淵からの 生還

あれからどれくらいの時間が経ったのだろうか。佳奈と友子の声が遥か遠くから聞こえてから。随分長い時間が経ったようでもあり、幾ばくも経っていないようでもある。

私、山部聡 52歳は脳梗塞超急性期であったために血栓溶解療法を受けた。はらはらはらはらと消えゆく脳細胞を一つでも多く引き留めるために血流の再開をひたすら待っている。そして干上がった田にせき止められていた水が流れ込むように、今、待ちに待った血流がやっと再開された。そして、酸素は干上がった細胞に速やかに届けられた。

やった！俺の脳よ、よく持ちこたえてくれた。被害は最小限に食い止めることができた。あれだけ重かった指があたかも魔法が解けたかのように抵抗もなく動く。とにかく身体が軽い。私の身体を埋め込んでいた鉛の板が溶けたかのようなのだ。ただ、

左手足にはまだ違和感が残っている。頭の中もまだ霞がかかったようだ。

遠くから愛おしい人の声が聞こえる。この心が温くなる感覚は一体なんだ。「お父さん！」誰の声？佳奈？佳奈か。佳奈の声が聞こえる。「あなた、分かる。」今度は友子の声をはっきりと聞こえる。そうか、俺はかけがえのない家族に守られていたのだ。そして、助かった。死の淵から返り咲き九死に一生を得た。棺桶の中から這い上がってこれたのだ。俺は生きている。生きている。生きている。涙が次々とあふれ出てきた。

「お父さん！」佳奈も泣いている。「あなた」友子も私の手を握り締め泣いている。皆、泣いている。そう、助かった、助かったのだ。

でも、なぜこんな事になったのだろうか？落ち着いて振り返ろう。検診もちゃんと受けていたじゃないか。血圧は高かったけれど、何の症状もなかった。検診結果では高血圧と指摘されていたが、日々、仕事の忙しさ、付き合い、家族の行事ごとなどで病院に行く暇などなかった。いや、作らなかった。大きな病気が見つかるのも怖かったから。こんな大変なことになるとも思っていなかったし。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科  
(県立中央病院 前)

院長 中村 陽一